

10月  
的外  
🎃🎃🎃



みのる法律事務所  
弁護士 千田 實  
〒021-0853  
岩手県一関市字相去57番地5  
TEL:0191-23-8960  
FAX:0191-23-8950

みのる法律事務所便り

第378号

令和3年10月

いなべん だべんく  
田舎弁護士の駄弁句 (103)



公言す 飲む 打つ 買うの その裏で  
死をも辞さぬ 他人への思い

令和3(2021)年10月1日  
青空浮世乃捨



遠藤隆一先生は、「天下の三道楽、飲む、打つ、買う、何もしないで100まで生きた奴がいた。皆いっせいに笑う」と語り、「一度限りの人生は、自分も楽しく生き、他人にも楽しく生きてもらわなければならない」と明るく、朗らかに笑っています。

遠藤先生ご夫妻は、いつでも明るく、屈託がなく、そのまわりには、いつでも日差しが照り輝いています。

飲む、打つ、買うを公言する裏では、「世の中の人に見てもらいたいの一心得、たった一筋の光線をからませてみたくて、氷点下十五度の山頂に八時間余り立ちつくすこともあった。死をも辞さぬほどの心境となっていた」とも語っている。死さえ覚悟して、人生を楽しみ尽くし、尽くさせようとしておられる。その生き方に惚れました。

「自分も楽しく生き、他人も楽しく生きてもらわなければならない」という遠藤隆一先生と、先生を支えいっしょに歩み続ける奥様・房子先生の生き方には、深く共鳴します。先生ご夫妻の生き方、つまり哲学に共鳴し、『いなべん短編集』の第6話として、『人生快なり』と題して、遠藤隆一先生ご夫妻について語りました。この事務所便りと一緒に同封します。

いなべん だべんく  
田舎弁護士の駈弁句 (104)

人生に 定年なしと 語る反  
60から 黄金期よし



令和3（2021）年10月1日  
青空浮世乃捨

岩手県盛岡市で、健康指導をなしている松村<sup>きとる</sup>諭先生は、71才となっていますが、その若さには目を見張ります。髪はふさふさ・黒々、肌は<sup>つやつや</sup>艶艶、体の柔軟性は高校生以上、卓球選手として何度も国体・全国大会に出場し、いまだにその実力は全国大会出場レベルです。ヨガの指導を始め、健康食品の普及、全国各地での健康講演など、休む暇などありません。

松村先生は、「人生100年時代、60才で定年し、その後働かない人は、病気と貧乏と孤独な老人となるだけだ。『定年後 犬も嫌がる 5度目の散歩』などと笑われていてはならない」と語っています。

先生のこの考え方には、深く共鳴します。60才で定年退職し、その後働かなくなったら、誰もが100才まで生きられる可能性がある「人生100年の時代」の残りの人生は、どうするのでしょうか。

人生は、金だけではありませんから、定年退職しても金を稼げとは言いません。ですが、少しでも世のため、人のために役立ちたいものです。世のため、人のために役立つ活動をしてこそ、60才からの人生は黄金期となるのです。

そうしないと、60才から100才までの40年間、つまり人生の黄金期は、病気と貧乏と孤独で、地獄の時代となってしまいます。松村先生の『60才から黄金期』という生き方を『いなべんの短編集』の第7話として書くことにしました。出来上がったら、この事務所便りに同封します。先生の前向きな生き方を見習いたいのです。



## 『 人生百年時代 』

令和2(2020)年9月15日、厚生労働省は、全国の百才以上の人口が8万0,450人に達したと発表したそうです。

8万人を超えたのは、令和2(2020)年が初めてだそうです。1千人を超えたのは、昭和56(1981)年、1万人を超えたのは、平成10(1998)年だそうです。1千人台から1万人台に入るまで、20年もかかっていません。1万人台に入ってから8万人を超えるまでも、20年ちょっとです。

「誰もが百才まで生きる可能性を持つ時代」となったのです。こういう時代になった今、60才定年では、定年後の40年近い人生をどう生きるかということは、極めて大事な問題となります。

この事務所便りを読んでくださっている岩手県奥州市の小野寺孝喜<sup>こうき</sup>さんが毎月送って下さる道徳を考える月刊紙『ニューモラル』No.625号(令和3年9月号)は、「人は誰も老いる時を迎えるものです。年を重ねてもなおいきいきとした毎日を送るためには、どんなことが必要でしょうか。日々の心の姿勢という視点から、ご一緒に考えてみませんか」と語り掛けています。

いなべんの短編集は、第6話として『人生快なり』というタイトルで、遠藤隆一先生ご夫妻の「自分も楽しく、他人も楽しく生きる」という生き方を書きました。第7話として、『60才から人生黄金期』というタイトルで、松村<sup>むか</sup>論先生の「60才からは人生の黄金期にさせなければならない」という生き方を書いています。いいタイミングです。この機会に、人生百年時代について語ってみます。

定年退職後100才までの40年間は、心の姿勢次第では、黄金期とも地獄ともなりそうです。心の姿勢をしっかりと保たなければ、松村先生が語るように、「病氣と貧乏と孤独」で苦しむ時代となりかねません。こうなつては、黄金期どころか、生きたまま地獄に落ちるといった感じです。

なりゆきにまかせていては、人生百年時代の最後の40年は黄金期どころか地獄となりかねません。60才から人生の黄金期を迎える生き方を考えてみます。

「心の姿勢」という視点は、60才からの人生を黄金期とするためには、最も大切な考え方です。「姿勢」とは、本来は「ものごとに向かうときのか

らだのかっこうや構え」を言いますが、「心の姿勢」はものごとに対する心の構えを言います。

年を重ねれば体の成長は止まり、衰えます。しかし心の成長は止まらず成長し続けます。60才からの人生を黄金期とするためには、心の成長を活用することが大事です。心の姿勢、つまりものごとに対する心の構えが大事です。年を重ねれば、体力は衰えますが、知恵は増え、深くなります。知恵を活かすのです。知恵で生き方を進化させるのです。

そんな時、『人生快なり』の主人公遠藤隆一先生の「人生は自分自身が楽しく生き、まわりの人にも楽しく生きてもらう」という生き方は、60才からの人生を黄金期とするためには、最高の理念、つまりどうあるべきかという最も根本となる考え方だと共鳴します。

そして、『60才から黄金期』の主人公松村諭先生の「人生には定年はない。定年を考えていては、60才からの人生は、病氣と貧乏と孤独の地獄に落ちる」という考え方に共鳴します。

いつまでも金を稼げとは言いません。ですが、生きている限り、他人のために少しでも役立ちたいものです。体力が衰えても、それなりに他人のためにやれることはあります。これには定年などないのです。定年は、金のため事業家が考えた<sup>したく</sup>くみに過ぎません。人生には定年などないのです。

三度の食事の支度をしたり、孫をみたりすることは、おばあさんがよくやっていますが、立派な仕事です。家族が喜び、安心して外へ出て働けます。道路の草取り、小学生の通学の見守り、ボランティア活動は、地域社会の役に立ちます。年寄の体験談を語ることも、後に続く者の参考となります。

他人のために役立つことをすれば、それが自分の生き甲斐<sup>がい</sup>となって、60才からの自分の人生を楽しめるものとしてくれるのです。他人のためだけでなく、自分のためとなるのです。

60才からの人生を黄金期とするためには、「人生は、自分自身が楽しく生き、まわりの人にも楽しく生きてもらう」という遠藤隆一先生の『人生快なり』と、「人生には定年はない。生きていく限り、他人の役に立つため働く」という『60才から黄金期』という松村諭先生の心の姿勢を見習いたいものです。